

氏名	Farnsworth Yurie		
ヨミガナ	ファンズワース ユリエ		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博音第384号		
学位授与年月日	令和6年3月25日		
学位論文等題目	（論文） THE ART OF INTONING MUSIC: AN ALTERNATIVE APPROACH TO ANALYSIS AND INTERPRETATION OF RACHMANINOFF'S PIANO MUSIC THROUGH BORIS ASAFIEV'S CONCEPT OF INTONATSIYA		
	（演奏） ラフマニノフ：Piano Sonata No. 2 Ver. 1913/1931 他		
論文等審査委員			
（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 江口 玲
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 坂井 千春
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 青柳 晋
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 福中 冬子
（副査）	国立音楽大学	准教授	中田 朱美

（論文内容の要旨）

本研究は、ボリス・アサーフィエフにより提示され、その当時から現代に至るまでのロシア音楽の演奏解釈において重要視されてきた「抑揚理論」を通じて、セルゲイ・ラフマニノフのピアノ楽曲の演奏解釈方法を論じるものである。抑揚理論の概要や定義、理論構築の背景に加え、当時（1940年代）から現代に至るまでの、同理論の展開を詳細に考察したうえでそこから得られた知見をラフマニノフの自作自演録音の分析に援用し、ラフマニノフのピアノ楽曲の「理想的」演奏解釈を提示することが、究極の目的である。

本研究で扱う「抑揚」（＝「イントナツィア」）はロシア内の音楽教育や演奏法では大切とされている概念であるが、まだロシア外ではそれは広く知られていない。アサーフィエフ理論においてそれは、音に「意味」を与える概念として論じられている。アサーフィエフによる記述には時に意図的にも感じられるほどの曖昧さが含まれており、「抑揚性」の定義や例が的確に提示されていないため、この理論自体をめぐる批判や疑問は少なくない。

ただ、少なくとも、同理論は20世紀のロシア文化と芸術の世界を大いに反映していると考えられ、アサーフィエフによれば、これらの「抑揚」を正確に把握できている作曲家こそが真のアーティストであった。さらに、彼は「ロシア精神」と言うものを常に様々な芸術の中で求め、そのエッセンスがロシア音楽界の将来の力となると論じている。そのため、当時のロシア文学や詩の重要性も主張し、音楽と言語の繋がりを論じ、言語学用語を通じて述べている。

1990年代、ヴァレンティナ・コロポーヴァがアサーフィエフの概念をさらに展開し、アサーフィエフが主張した言語学要素やナショナリズムにとどまることなく、人間の感情や記憶を基にした要素をもとに同概念について論じている。他方、音楽学者であるアサーフィエフの議論はともすれば抽象論に終始しているとも言え、その意味で同概念を如何にピアノ演奏に適用するかについては慎重な姿勢が求められる。その事実はゲンリヒ・ネイガウス、コンスタンチン・イグムノフやオグスタ・マリンスカヤ等により展開されている技法と解釈についても言えるであろう。特に前者の二人は、抑揚理論を実際にピアノ解釈へと適用するにあたり音色（トーン）とリズムの関係の重要性を強調している。この二つの要素のつながりの表現上、ルバートの使用をマスターする必要性から受け、時間の揺らぎを使うことで、音程の間の空間、またはアーティキュレーションやデュナーミクスの様々なマーキングを上手く解釈し、聴き手に楽曲の「意味」を伝えることができる、と言うのが、本論文の主張の基盤である。

こうした要素はラフマニノフの自作の演奏や他の作曲家の作品の演奏にて確認できるものである。とりわ

け、二つの音で出来ている小さなフレーズにおいて、冒頭の音にテヌートやルバートをかけており、ラフマニノフ特有なタイミングが観察できる。曲の構成、調、拍子記号などの特徴から自作自演録音でそれらを反映する抑揚性（ルバート）が見られる。アサーフィエフはラフマニノフにおける様々な抑揚性について言及しており、後者の作曲家と演奏家としての能力を高く評価するとともに、ロシア文化そのものにおけるラフマニノフの重要性を主張している。

それを受け、本研究ではラフマニノフの協奏曲第2番を事例としてこれまで上げられた議論を元に抑揚理論を通じて解釈と分析のメソッドを述べる。ラフマニノフはアサーフィエフの抑揚理論が正式に出版される前に没している。そのため、ラフマニノフはその理論を考えながら弾いたり作曲したりしていた訳ではない。しかし、アサーフィエフはそのラフマニノフの演奏を生で聴きロシア文学者のテキストを読み、それらから得た感想や情報で抑揚理論を生み出したと考えられる。その上で、19世紀以降のロシア楽曲を理解するためには抑揚を通じての解釈が必須であるということを主張したい。そして、それをピアノで実技的に表す最も重要なツールとなるのは、音色とリズムの境目に生きるテンポ・ルバートである。過去と現代を両方把握しながら芸術を生み出す大切さはアサーフィエフの主張であり、ラフマニノフの作風や演奏法と共通するものもある。そのため、抑揚理論を中心としたアプローチでのラフマニノフ楽曲の演奏解釈が望ましいと考える。

Abstract

Boris Asafiev's theory of intonation (as presented in his work *Musical Form as a Process: Intonations*), or "intonatsiia", is an important concept in Russian pianism and music education. However, despite the legacy and impact that both Asafiev and his theory sustain within his home country, they remain relatively unknown of outside of Russia to this day.

This study will examine Asafiev's theory in conjunction with contending its applicability and conducive nature in interpreting Sergei Rachmaninoff's piano music. Together with an analysis of Rachmaninoff's pianism by way of his own recordings, this study will show that the concept of intonation brings to light a new, alternative method of interpretation and performance of Rachmaninoff's works that can be deemed as most "authentic", preserving integrity towards both Rachmaninoff (as composer and pianist) and the era in which his works were born.

Chapter 1 provides a contextual overview surrounding the conception of Asafiev's theory and its basic principles as well as posthumous developments. The implications and connections with the linguistic field's understanding of intonation will be discussed, in which musical constructs such as rhythm, melody and intervals are highlighted in their role of elevating music to a medium of communication rivaling language.

Using these elements, chapter 2 delves into methods and techniques of incorporating intonation into practical piano performance, guided by the theorizations of pedagogues and pianists who inherited Asafiev's theories. Temporal elements – most specifically tempo rubato and its subsidiaries such as articulation or dynamics – are identified as the main tools for expressing the intonations of a piece of music in a way that can be objectively heard and experienced in performance.

In chapter 3, these aspects of rubato, agogics and intervallic inflection will be discussed under the purview of Rachmaninoff's pianism. Heralded by Asafiev himself for his intoned approach to composing and performing, Rachmaninoff seemingly exemplified not only intonational greatness, but the Russian spirit of his era as well. As such, specific intonational qualities of Rachmaninoff's pianism and composition will be discussed, including his use of particular rhythmic semitones in melodies and tertian key relationships.

A case study of Rachmaninoff's second piano concerto will be presented in the final chapter, synthesizing all of the elements previously discussed. The intonational analysis and interpretive possibilities outlined will aim to provide a template that can be applied to all of his piano works.

For all his efforts in theorizing on intonation and musical form in universal, broad strokes, Asafiev's theories remain culturally and spiritually Russian, a descriptor that can also be ascribed to Rachmaninoff's lifetime of works. As such, Asafiev's theory of intonation becomes a valuable lens through which an alternative, but ostensibly authentic method of interpretation can be formed for not only the works of Rachmaninoff, but other Russian composers as well.

(総合審査結果の要旨)

本研究はロシアの音楽学者、ボリス・アサーフィエフにより提唱された「イントナツィア(抑揚論)」を通じて、セルゲイ・ラフマニノフのピアノ楽曲の演奏解釈方法を論じるものである。

まず研究における前提となるアサーフィエフの抑揚概念は、ロシアの言語、社会、文学、自然等から派生する要素をロシア音楽に反映させることで、その独自性を芸術として高める事を求めるものであるが、言葉が抽象的であることや一貫性の欠如等が指摘され、その他の研究者たちによって理論として実体化されてきた経緯がある。この論文の主軸となるラフマニノフ作品への演奏解釈は、この抑揚論から導かれる解釈の一例として明確に示されていた。また、抑揚の説明は理論的な文調で理解しやすくまとめられていたが、その内容は通常の実技指導の中で別の表現で示されるものも多く、いわば特に目新しいものではなかったかもしれない。しかしながらそれを体系立てて文章化したという意味では評価する。一方で研究においては、抑揚論の一次資料として扱われるものが明確に示されておらず、二次資料との混在やその出典、引用等の緻密な記載にも不備があるため、論文としては杜撰であると言わざるを得ない。また当初題目に使用されていた「抑揚理論」という言葉についても、アサーフィエフはこれを理論として成立させたものではないことから、「抑揚論」として扱うべきではないかということも指摘された。

演奏審査では、まずラフマニノフの「ピアノソナタ第2番」が取り上げられた。このソナタには2つのバージョンがあり、冗長となりかねない初版と構成的にやや無理があると思われる改訂版を独自に抑揚の観点から再編成し、それを一つの理想案として演奏された。続けてラフマニノフの「ピアノ協奏曲第2番」がオーケストラリダクションの第二ピアノと共に演奏され、こちらは論文に取り上げられた通りの抑揚に基づく解釈が展開された。どちらも難曲として知られるこれらの曲の演奏はそれ自体が評価されるものであるが、どちらもその解釈や旋律の歌わせ方は非常に魅力的であり、演奏には極めて高い評価が与えられた。この演奏はラフマニノフ自身の演奏解釈を真似るものではなく、抑揚論からの解釈という視点で十分にその研究成果が見られた。

以上これらを相互的に評価し合格とする。